

俗世の「挨拶」 — 「あいさつ」の発生（3）

● 高橋 六二

1、諸道と「挨拶」

禪が日本に入って広まるのがおおよそ13世紀。200年ほどを過ぎると、すでに前回にみたことではあるが、次のような事例が見られるようになっていた。

神事^{じんじ}を本にして、貴人の御前などには、御意のまゝたるべし。然れども、恐れたる心^{しんぢゅう}中現れずは、又尾籠^{びろう}なるべし。細河武州の御前にて、当道の中に礼を申ける時、「かゝる尾籠^{びろう}の者はなき」と仰^{をう}せける也。人の挨拶大事なるべし。

（『申楽談儀』—日本古典文学大系本 p. 537）

『申楽談儀』は奥書に永享2（1430）年11月11日、秦元能^{はだのもとし}が父世阿弥（1363頃—1443頃）からの聞き書きを記して志を残し置くのだ、とあるものである。申楽（猿楽）の世界で「挨拶」がこのように用いられていたことに注目しておきたい。細河武州は足利義満に仕えた細川頼之（1329—1392）のことで、禪に深く傾倒したことでも知られる。世阿弥がここに「挨拶」と言っているのは、こうしためぐりあいの中からえた心得だったのだろう。

別にまた、香道の例も見られるようになる。

香合の時。先左右の座上に方人のかうだゝみのこらず香盆にのせてさしをく。さて方人左右にわかち。次第々に座に着。暫ありて火とりて。香盆にすへもてまいり。左の座上の人の前にをく。右の座上の人の前へとあいさつす。右の人なをそれよりといふ。

(『五月雨日記』－「群書類従」第19輯 p.579)

これは文明11 (1479) 年5月12日に東山殿 (足利義政) で行われた香合わせの記録である。この「あいさつ」を『岩波古語辞典』補訂版は「相手に祝意・謝意・敬意などを表わすために述べることば。」としている。香合わせは義政の頃に作法体系ができあがったといわれるが、ここに「あいさつ」とあるのも、禪の思想との関わりのうえに営まれた東山文化の一端を見せていることになろう。

もう一つ、茶の湯の場合がある。喫茶の習慣は遣唐使によって伝来したといい、臨濟禪を招来した栄西 (1141－1215) は、中国宋代の新しい製茶・喫茶の法をももたらし、源頼朝のために『喫茶養生記』を書いて茶の効能を述べた。その後、禪の思想をふまえた茶の湯が形成され、村田珠光 (1423－1502) ・武野紹鷗 (1502－1555) ・千利休 (1522－1591) らをへて茶道が形成される。茶の湯もまた禪や武家との交流の中からひとつの文化を生み出したわけである。

大人俄に御立より有時は。建蓋の天目など近き比ほり出すなどゝいひ。愛拶して御茶を進上有事然るべし。あながち天目にあらずとも。時の興にさやうの仕合しかるべし。

(『喫茶雑話』－「続群書類従」第19輯下 p.511)

これも前回にみたもので、江戸の事例ではあるが、やはり「愛拶」(挨

拶)を茶の湯の作法に取り込んでいることを示している。

「挨拶」は中世の禅文化とともに広く展開していたのである。

2、変容する「挨拶」

さて、禅家の「挨拶」がどのようにして俗間に広まったのか、はっきりとはわからない。それでも、次のものなどはいくらかそのつながりを見せてくれる「挨拶」の事例である。

浅井了意『浮世物語』(寛文6=1666年頃)六「傾城狂ひ異見の事」

(略)さればこそこれに飽あき果はて、かれを忘れかね、又ゆ行くきて逢あひ
れば、谷うぐいすの戸はつね出をる鶯ぼろの初い音だ籠きの聲はを出はし、「又は来きさんしたか。早はやう
往いなんし」など言いへば、この御こと言ご葉ごの有が難たさ、いかなる和く尚しやうの一句
提てい携せいの示しめしもこれには勝まさらじと思ちかはれ、近よく立かた寄より、とかく語かたらへ
ば、親したしきやうにして打うち解とけず、気きの毒どくなるやうにて愛あい拶さつ面おも白しろく、
三く味き線せんを引よ寄せ、でつるてんと引ひ撥びき音ね、頓とんて買か手てを上あり鯰なまずに
せんといへる響ひびきあるぞゆゝしき。(略)

(日本古典文学大系『仮名草子集』p.255)

石田梅岩『都鄙問答』(元文4=1739年)卷之二「或人親へ仕之事ヲ問之段」

(略)曰。我タビモ前イ方ハナ々ハダ出トデ申ト候マキトコロ、親ハナドモ甚ト不マキ届キノ由
ヲ申トシ、當トウ分ブン禁キン足ソク致ムスベキ旨ワタ申メ渡イシ候ツユヘ、私メイモ迷ラク惑ツ仕カり、禁マ足カ
ノ請ウケ合ア致ヒカネ候タシトコロ、右ゼンノ禪モン門アイ挨拶サツイタシ、若ワカキ者者ノコトナレ
バ、気バラシ晴タメノ為タメニ、月ユウニ一ウ兩ウ度ウヅ、ノ遊ユウ興ケウハユルサルベキ由ヨシ申シ、
兩ユル親イデトモニ得ユル心イデイタシ、免ユルシニテ出イデ申シ候トコロ。(略)

(日本古典文学大系『近世思想家文集』p.408)

「良寛禅師戒語」

—ことばのおほき（中略）

—ことごとに人のあいさつきかうとする（中略）

—人のことをききとらずあいさつする（後略）

（貞心尼編『はちすの露』新編国歌大観 DVD-ROM 版）

『浮世物語』の「一句提携の示」は頭注に一禅句、一話則の意であろう、師僧が弟子を警めて教え導く事、愛拶は対応の言葉、挨拶の慣用当字、とある。傾城の「あいさつ」が和尚の一句提携にも勝って遊客をひきつけるというのである。

『都鄙問答』は心学書。題名のごとく各編は問答体で叙述されている。それは禅に通じるスタイルである。この話で「右ノ禅門」とあるのは、問いを発している「或人」の祖父に仕えた手代のことで、今は法体しているものをさす。「挨拶」は頭注に「とりなす。仲裁する」とある。当時は商家の主人・番頭・手代などが晩年に隠居して僧体になるものが多かったという。それで「挨拶」ということばも自然に使われえたのだろう。

良寛（宝暦8=1758-天保2=1831年）は曹洞宗の僧。貞心尼はその詩歌集等の刊行に尽くした。この戒語はことばづかい、話し方などについての90条からなる。およそ日常的なあり方について言っている。『定本良寛全集』第三卷（中央公論新社 2007年刊）はこの「あいさつ」を「受け答え。返答。返事。」としている。禅のそれを離れたふだんの生活の場合のことで言っているのである。

ここに「あいさつ」が禅僧をとおして、あるいは禅を離れて日常語化していくさまを見ることができよう。ただし、『角川古語大辞典』の「あいさつ」の項には、「元来禅家の語で、（略）門下の僧に推問答して、その悟道知見の深浅を試みることであるが、わが国五山の禅林では、受け答えの意に軽く用いるようになる」とある。その論拠は確かめえないが、

なお考えてみる必要がある。

たとえば新装版『図説 禅のすべて』（木耳社 2008年刊）には「挨拶をかわす雲水たち」というキャプションの写真一葉がある（p.105）。そのさまは本文（p.103）に、

僧堂内では長幼・新旧の別なく、歩行中二人が面を合わせると、足を止めて互いに合掌低頭（敬礼）して、また歩む。これを僧堂の用語で、問訊もんじんという。中国の古制では、合掌し低頭して語を述べるのを問訊といっているが、今日の僧堂では敬礼のみを行う。

とあるのに相当しよう。すると「挨拶」は「問訊」ということであったのか。古賀英彦編著『禅語辞典』（思文閣出版 1991年刊）は「問訊」を「初対面のあいさつをする」意としている。

こうして江戸期になると、「挨拶」は禅家を離れて多方面に展開した事例が見られるようになる。それは禅が民衆社会に浸透したというよりも、社会の多様化とともに民衆文化が広く成熟していったことによるのであろう。

（略）人の親疎しんそをわきまへず、わがかたより馳走顔ちそうがほこそはなはだもつておかしき事なれ。我程々に従つて、其挨拶（頭注一人に対するあしらい）をなすべき也。

（仮名草子『伊曾保物語』中・廿二・馬と犬との事 大系本 p.413）

（略）いかなる人が爰こゝに寝てとつい居て、まだ夢もむすばずありしに、さいぜん最前の男どきり戸をならして、「若御茶もしおちやをまいらば」とゆとに天目てんもく置をきて歸かへる。此このかるさ下り舟（くだ）ふねにのる心知して、「一夜こゝちの事なればあし足のさはるも互たがいに御免ごめん」（頭注一まくら下り船でする挨拶言葉）と枕まくらも定めさだずあひ床どこをきけば、伊賀の上野い が うへ のの米屋、大崎こめやといへるを四五度さき

なれ
馴たるあいさつ（頭注一応対のしかた。口のききかた）にて、あす
くにもと かへ なごり だう ごわう さいだいじ (つけ)
は国本に歸るよしの名残とて、二月堂の牛王・西大寺こゝろを付て
つかは
遣し侍る。（略）

（西鶴『好色一代男』巻二・誓詞のうるし判 大系本・上 p.71）

もんもう だう けもの すみ ある
文盲にしてしかも道外者あり。其となりによしある人住けり。或
とき
時夫婦いさかひはじまりて、たがひに聲たかくなりけるに、かの道
ゆき さいちう
外者行、喧嘩最中に挨拶するこそ、「おまへ様がおまへ様なれば、
こな様がこな様なり。事のたとへにも、大坂に介六といふ大工さへ
ござ
御座るに、堪忍さしやんせ」といへば、此つかぬ言葉がをかしゆな
こと ば
りて、夫婦ともににがゝゝ笑て中をなをりた。

（『軽口露がはなし』巻の二 大系本「江戸笑話集」p.249）

すい (つとめ) ねんごろ
「(略) こな様とわしがやうな倅同志の、 勅 離れて念比いたす
なか しよしん ならひ ましやう かい
中に、初心らしい女郎の習の起請を書いて進ぜては、『それ程おれを
しろ
素い客じやと思やるか、誓紙など取合ふやうな挨拶（頭注一間柄。
関係）ではないわいの』と、お気に入まいかと思ふて書て進ぜませ
(いる) (かい)
ぬが、何と私が見立ての通り、書かして取 氣じゃ有まいがな」と、
(とる) (ある)
てき すい
敵を倅に仕立てゝそやすれば（略）

（浮世草子『傾城禁短氣』五之巻・禿も水上してから即身上物 大系本 p.345）

あゆ (こい) しに ば くだ
地なういつまでうかうか歩みても。爰ぞ人の死場とて定まりし所
(こい) わうじやうば ぎ
もなし。いざ爰を往生場と フシ手を取り土に坐しければ。地色され
しに ば おな
ばこそ死場はいづくも同じことと 色いひながら。詞わたしが道ゝ
ふたり しにがほなら ばる や さ た
思ふにも二人が死顔並べて。小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば。
ころ
おさん様より頼みにて殺してくれるな殺すまい。挨拶切る（頭注一
かは ころ
（治兵衛と）縁を切る）と取交せしその文を反古にし。地色大事の

男をそゝのかしての心中は。さすが一座流れの勤の者。義理知らず
いつは 偽り者と世の人千人萬人より。おさん様一人の蔑み。恨み妬みもさ
ぞと思ひやり。未来の迷はアジ一つ。

(近松『心中天の網島』下之巻・名残の橋づくし 大系本・上 p.384)

定八 「マアマアお待なされませい。」

初瀬 「何じゃ知らぬが、半兵衛様の難儀そふな。爰はわしが挨拶(ここ)(頭注一仲裁の口をきいて)して貰もらやんしゃう。お客様、マア了(れうけん)簡なさんせ。」

定八 「アレ、旦那、御聞(おきき)なされましたか。美しい大夫職うつくが挨拶なれば、こゝを御聞(おきき)なされぬと、野暮やぼじゃと言ふぞへ。」

(歌舞伎『幼稚子敵討』三つ目・島原の揚屋松嶋屋 大系本・上 p.176)

(左平次) 「コレコレしづかになされ。そないにいふたら、ひよつとずてたぬしがきゝつけて、出まいものでもないさかい。何じやあるとわしが挨拶あいさつ(頭注一挨拶人の略。中に立って扱う人。とりなしをする人)じゃ。半分づゝわけなされ。そしてわしにもちとはおくれじやあるな

北八 「ソリヤアおいらがしやうちの助だ。何にしる善ぜんはいそぎだ。かね金はどこで受取のだろう

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』八編上 大系本 p.445)

江戸期の文献から索引したいくつかを、年代順に列記してみた。仮名草子・浮世草子・咄本・浄瑠璃・歌舞伎・滑稽本などに見られる例である。「挨拶」があしらい、対応のしかた、仲裁、間柄、縁、とりなしをする人、などの意味で使われている。これらは、いわば江戸時代の庶民たちの日常生活の中で、ごくふつうに聞かれる「挨拶」ということば

だといってよいだろう。どんな言い方をするかということもさりながら、単に「挨拶」と言っただけで、これだけ多様な人間関係のありようを表すほどになっているのに驚く。悟道・知見を試みる意で禅から発したことは、かくて大衆の日常語へと展開したのである。それはあるいは、人々がこのことばに新感覚といったようなものをおぼえたことが、そうさせたのかもしれない。

近松が「挨拶切る」と言っているのはほかにも多くの用例があることだが、「挨拶」はまた次のような慣用表現・熟語をも生みだしている。

あいさつがあがる

あいさつは時の氏神

あいさつをあげる

挨拶柄

挨拶人

挨拶者

御挨拶 (『日本国語大辞典』第2版から江戸期のものを摘記)

こうした現象が起こるのは、「挨拶」ということがひとつの時勢としてあったことによるのではなかろうか。「挨拶」が新しい文化を形成しようとしているといってもよい。

しかしまた、江戸後期には次のような所説があることも留意しておきたい。

伊勢貞丈^{さだたけ} (1717-1784) 『安齋隨筆』 卷之三

○挨拶 (アヒサツトヨム) 今世俗に應答を挨拶と云ふは當らぬ義なり挨の字は字彙に迫とあり拶字は玉篇に逼拶なりとあり然れば挨拶の二字セマルとよむなり應答の儀に非ず俗に云ふアヒサツは謝の字なり是れあたれり字彙に以_レ辭相告曰_レ謝

(『増訂故実叢書』 p. 66 吉川弘文館 昭和4年刊)

つかだ
冢田虎『随意録』（文政8=1825年）巻五

○方俗挨拶之言。未_レ得_レ其所_レ據。挨擊也。推排也。楊子方言。強進曰_レ挨。拶逼也。相排迫也。韓愈雪詩。滿騰相排拶。皆非_レ方言之意。

（関儀一郎編『日本儒林叢書』第1巻 p.158 鳳出版 昭和46年復刊）

西田直養（1793-1865）『^{きさのや}笹舎漫筆』巻之四「○今の俗語におなじき古言」

西行物語に、あいさつといふことあり。

（『日本随筆大成』第2期3 p.102 吉川弘文館 昭和49年刊）

伊勢貞丈は有職故実家、冢田虎は儒者である。「今世俗に應答を挨拶と云ふ」とあるのは、世俗が「挨拶」の意を「応答」としていたことを示していて貴重だ。しかしそれを否定して古辞書的な主張をしている。冢田の場合も同様である。西田直養がいう『西行物語』は「続群書類従」第32輯上によってみたが、「あいさつ」の用例は見当たらない。それは別にして「あいさつ」を「今の俗語」としているのは、やはり貴重だ。「挨拶」はすでに俗世のことばだったのである。